

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593259

研究課題名(和文) 外来で治療を受け続ける再発大腸がん患者の「生を繋いで行く力」支援プログラムの構築

研究課題名(英文) A study of support program for psychosocial problems and countermeasures in patients with advanced/recurrent colorectal cancer on long-term chemotherapy

研究代表者

新藤 悦子 (SHINDO, ETSUKO)

慶應義塾大学・看護学部・准教授

研究者番号：20310245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：長期化学療法中の進行再発大腸がん患者の心理社会的問題に関わる経験と乗り越える力について明らかにし、支援のあり方を考えることを目的とした。

国内外の文献検討、支援の現状から、当事者は支援の声をあげない状況にあり、支援自体を期待していない状況が明らかとなった。さらに当事者の語りから、病状の悪化に怯えつつ、結局は一人孤独に闘う厳しさと向き合っていたが、同時に乗り越える力を有していた。その個別の乗り越える力を個別面談で支えることが重要である。また利用可能なリソースを継続的に提供していくことが求められる。

研究成果の概要(英文)：We studied the psychosocial problems and countermeasures in advanced/recurrent colorectal cancer patients receiving long-term chemotherapy.

The patients were surprised and regretful that they had advanced/recurrent cancer and had not achieved early detection and treatment. Since they could only stay alive by receiving treatment, they suffered from anxiety about disease progression and mentioned that it was easy to become depressed. The patients tried not to verbalize their feelings to their families and others. Treatment forced some patients to quit work. Nevertheless, they tried to overcome their problems. They coped with anxiety. They selected therapy and received it positively. They considered some symptoms of anticancer therapy inevitable and acted as if these symptoms were minor. They felt grateful for surviving and for family support. Patients with progressive disease who continue treatment are fighting a war by themselves and must try to overcome various problems.

研究分野：臨床看護学

キーワード：再発大腸がん患者 外来化学療法 心理社会的問題 看護

1. 研究開始当初の背景

2006年に策定された「がん対策基本法」では、「すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減ならびに療養生活の質の維持向上」を全体目標とし、進行・再発がん患者が安心して医療を受けられる仕組み確保の検証を行うとしている。がん患者・家族が何を望んでいるのか、当事者の体験にそって明らかにし、その支援体制を整える必要がある。

そのような背景のなか、増加の一途をたどっている大腸がんは、罹患数、死亡数ともに今後さらに増加が推定されている。大腸がんのなかでも、再発大腸がんは、化学療法の標準化及び分子標的薬の併用により、近年患者を取り巻く環境が急速に大きく変化している。

再発大腸がんとは、ステージⅡ～Ⅲの大腸がんで局所再発、他臓器への転移をきたし切除不能のがんであり、予後改善と生活の質(Quality of Life;以下QOL)向上を目標に全身化学療法が行なわれる。

再発大腸がんの治療の急速な発展のなかで、延命効果、QOLに関する状況をエビデンスとした治療レジメンの比較研究が行なわれ、治療法向上の研究が行なわれてきている。事実、大腸がんの場合、診断から5年以上の長期生存者は、部位別がんのトップを占めており、長期生存者が増えている。しかし、再発大腸がん患者は、この治療の恩恵に浴しつつも、その有害事象と闘いながら、病気を抱えて長期に、そして薬の効果がなくなるまで、「終わることなく」治療を継続していくことになる。

治療法の進歩は、延命に寄与し入院することなく治療を受けられる方法であると同時に、治療法選択やその実施に伴う迷いや不安を増加させることにもなる。

申請者は、これまで再発大腸がんと診断された3名の女性の療養体験に3年間寄り添いながら、繰り返し語りを聞くによって、その

療養体験を明らかにする研究を行ってきた(新藤、2010)。外来で治療を続ける再発大腸がん患者の体験は、自己が解体するという危機感をもたらす体験であった。当事者たちは、死の接近感の中で生を繋ごうと努力していたが、それは不安定で、かつ自己が解体される危機の中での、きわどく揺れ動く気持ちとの闘いであった。すなわち、再発がんで生存期間の延長のための治療を受ける何年にもわたる、この「再発後の期間」に焦点をあてた支援のあり方の検討が求められていることが明らかになった。病院で行われているがん患者のための相談窓口では、診療に関することは相談するが、心の奥底にある悩みについての相談は少なく、十分な支援が行われていない現状がある。単に「相談」業務のみではなく、Frank(1991/1996)のいう「新たな生の局面をともに共有」する態度と場が必要となる。がん患者のサポート組織については、国内外ともに乳がん患者の支援に関する研究は多いが、消化器がんは希少である。さらに大腸がん罹患の年代は50歳代～60歳代をピークとし、発達段階からいっても社会的にも影響を及ぼす働き盛りの年代が多い。そのような年代の支援のあり方の課題もある。

文献)(1)新藤悦子(2010)外来で治療を受ける進行再発大腸がん患者の語りを通じた療養体験.日本赤十字看護大学大学院看護学研究科2009年度博士論文(看護学).1～80(2) Frank A.(1991)/井上哲彰(1996)からだの知恵に聴く一人間尊重の医療を求めて.日本教文社

2. 研究の目的

近年治療が急速に発展している再発大腸がん患者の生存期間は延長されている。しかしその療養体験の実態はおよび支援体制は十分とはいえない。本研究では、外来で長期にわたって「エンドレス」な化学療法を続けていく再発大腸がん患者の支援体制づくりのために、当事者たちの生を繋いで行く体験と

支援のニーズを明らかにし、当事者と医療者
でつくる支援プログラムを構築することを
目的とする。

3. 研究の方法

- (1) がん患者支援に関する国内外の文献収
集と内容の検討を行い、がん患者支援の
方法、内容、その効果と問題点を明らか
にする。
- (2) 既存のがん患者サポート組織へのピア
リングを行い、現在の再発がん患者支援
の内容、その効果と問題点を明らかにし、
支援プログラム構築の参考とする。
- (3) 再発大腸がん患者の外来で長期にエン
ドレスの治療を続けていく体験の実態
について、当事者同士の相互作用のなか
で、どのような苦悩を抱えつつ治療を受
け続けているのか、生を繋いでいく体験
内容を明らかにし、療養に関するサポー
トの現状と支援ニーズを抽出するため
に、インタビューを実施する。
方法：質的記述的研究デザイン。対象
者：6ヶ月以上の外来化学療法を受けて
いる再発大腸がん患者7~10名。データ
は各参加者約60分の半構成的面接法に
よって収集し、その語られた経験を解釈
し分析する。
- (4) 上記結果より再発大腸がん患者支援モ
デルを構築する

4. 研究成果

- (1) 再発大腸がん患者の支援ニーズ、支援
の方法論、効果、課題に関する文献検討
治療後大腸がん患者の身体・心理・社会的
負担は多いが、患者からのアピールは少なく、
研究においても注目されていないことがわ
かった。他部位がんサバイバーのサポート方
法論の研究は多く、さらにグループ療法のエ
ビデンスが出されている。しかし大腸がんサ
バイバーサポートプログラムに関する介入
研究は少なく、現在RCTのPilot studyが発

表されている段階であった。それらの研究の
効果判定には不安やうつへの低減・ケアの満
足・QOLの向上などがあった。さらに再発
後治療継続中の患者を対象とした介入研究
は見当たらなかった。以上より、今後の研究
の取り組みに期待されていることが分かっ
た。再発後の患者は自己解体の危機を経験し、
そのなかでゆらぎつつ自己統制しつつ生を
繋いでいる。その支援のためには、現在行わ
れているRCT研究を参考にしつつ、個別対応
の心理社会的なアプローチが求められてい
ると考察した。

(2) 大腸がん患者サポート組織の支援内容 および課題

大腸がん患者サポート組織に対する聞き
取りを行い以下のことが明らかになった。

患者会の機能について：a ピアサポート、b
患者・家族からの相談、c 行政等への働きか
け、

活動内容について：a 就労支援：がん罹患
により、離職する結果になることが多い。一
方で治療継続には高額な治療費を要し経済
的問題は当事者にとって重要な問題である。
b 心理的支援：体験者は「理解してもらえな
い」という感覚に陥りやすく、孤立しがちで
あり、心理的サポートは欠かせない。c 相談
機能：がんに罹患した人の家族不安に対する
サポートの必要性。

医療者への課題と期待：医療機関における
相談やサポートの現状に対する意見として
は、時間的な問題認識があり、多くを期待し
ていない。また近年がん患者相談室などが設
けられサービスが開始されているが、利用し
づらい雰囲気もある。特に男性は気持ちをオ
ープンにしない傾向にある。声を上げられな
い人へのサポートが課題である。

(3) 諸外国の進行再発大腸がん患者の支援 について情報収集

国際がん看護学会(チェコ)(パナマ)、国際サポーターケア学会(ドイツ)に参加し再発がん患者支援の情報収集をおこなった。

サポーターケアに関しては、教育的サポートプログラムが中心であり、心理社会的なサポートについては今後の課題とされることが多かった。再発大腸がん患者のニーズ探索は今後の課題であることを他国の参加者と共有した。

23年度24年度の成果を発表した。進行再発大腸がん患者の生存期間の延長に比して、日本に限らず研究が少ない現状を報告し、参加者と共有しあえた。子宮頸がんや前立腺がん患者の経験に関する質的研究もあり、今後支援ニーズの研究に弾みをつけるものとなった。

(4) 当事者たちの心理社会的問題に関わる療養体験

6ヶ月以上外来化学療法を受けている50～70代の進行再発大腸がん患者7名の語りを分析の対象とした。参加者は1～5年間再発後の化学療法を受けており、面接は60～90分実施した。慶應義塾大学看護医療学部研究倫理審査委員会(受理番号208)・慶應義塾大学医学部研究倫理審査委員会(承認番号20130192)の審査を受け、承認を得て実施した。

参加者は早期発見、早期受診の行動が取れなかったことを昨日のこのようにリアルに語り、それが進行再発がんとなってしまった驚きと後悔として語った。転移したがんに対する治療を続けることでしか生き続けることができない事実直面し、不安にかられ、常に悪化を心配、鬱になりかねない心境を語った。さらに家族のこと、将来のこと、これまでの人生のことを考えた。しかし気持ちの詳細は言葉にしない様にしていた。また人によっては仕事の種類によってはこの治療に

よって辞めざる得ない状況をもたらしていた。参加者はこのような状況に於いても「考えても仕方がない」「気にしない」と自分自身に言い聞かせる形で対処し、「もう少し生きたい」「命ある限り生きよう」という気持ちによって治療を選択し前向きに取り組んでいた。また抗がん剤の副作用による手足のしびれ、爪や皮膚の炎症による痛みや感染リスクが日々の生活や仕事に影響を及ぼしていたが、そのような症状は治療をする上では仕方がないことと受け止め、たいしたことではないように振る舞った。そしてできるだけ体力の維持に努め、普通の日常生活を送る努力をしながら過ごしていた。経済的な負担は彼らにとってはさほど大きくはなかったが、金の切れ目が命の切れ目となりかねないことを常に意識し、治療を続けられる経済的な余裕と支援に感謝していた。また家族による手厚いサポートに感謝し乗り越える力としていた。

以上より、参加者は発見の遅延を自責し、病状の悪化に怯えつつ、結局は一人孤独に闘うという厳しさと向き合っていた。生きていくためには外せない治療と向き合い、辛さを軽く受け止めるように努力し、家族や経済的なサポートを受けることを力にしていた。また患者は医療機関にそのようなサポートを期待していない傾向にあった。心理社会的サポート情報が病院内に提示されていても、当事者の目に入りやすく、外来時の短時間の診察時はそのニーズを表出する場ではないという認識をもっており、看護相談を受けること自体を考えていなかった。一方患者自身の乗り越える力は大きく、病いをもち、治療を継続していくことを自らの生手段として価値づける力をもち、日々の治療現場でいいケアを受けている信頼感と家族のサポートによって、心理社会的問題に対処していることが明らかとなった。患者本人のレジリエンスは療養上重要であり、そのレジリエンスを

高めて行くために、個別の看護面談でその力を共有し、必要な情報がいつでも利用可能なリソースが個別に継続的に提供されていくことが求められる。

(5) 国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

この研究成果は、進行再発大腸がん患者の療養体験を明らかにし、支援のあり方を考察し支援プログラムを構築しようとしたものである。医療の進歩によって進行再発大腸がん患者の延命が可能になったが、国内外において研究が少ないこと、当事者によるアピールが少ないことにより、その療養経験の実態が明らかになっておらず、支援のあり方を考えていくことが課題となっている。特に、わが国において大腸がん罹患、死亡ともに増加傾向にあり、その必要性がますます高くなっている。その意味で、この研究成果は今後の支援のあり方を考えていく一助となる。本研究が調査参加者リクルートに困難があったために時間を要し、研究期間内に支援プログラムの構築まで及ばなかった。今後は、さらにデータを集積し、支援方法を追及していく必要がある。再発がん患者の療養は、実存的な心の苦しみや社会的背景に伴う問題が身体的問題と一体化しており、その支援は全人的な視点を抜きには考えられない。またその支援は患者の死亡まで継続されることが求められる。個人のレジリエンスを高めるために、存在意味論的なアプローチを含めたものを考えていきたい。

5. 主な発表論文等 〔学会発表〕(計3件)

1) E. Shindo, M. Chaen, H. Komatsu, K. Okabayashi, M. Turuta. Psychosocial Problems and Countermeasures in Patients with Advanced/Recurrent Colorectal Cancer on Long-Term Chemotherapy, 2015 International Symposium Supportive Care in Cancer. June. 25-27(2015), Copenhagen

(Denmark)

2) E. Shindo, M. Chaen, H. Komatsu, K. Okabayashi, M. Turuta. Psychosocial Problems of Patients with Advanced/Recurrent Colorectal Cancer Receiving Long-Term Chemotherapy. 18th International Conference of Cancer Nursing. Sep.8(2014), Panama City (Panama)

3) E. Shindo, M. Chaen, N. Yamagishi, H. Komatsu. Current status and challenges of building a support system for patients with recurrent colorectal cancer using a psychosocial support program. 2013 International Symposium Supportive Care in Cancer. June. 27-29(2013), Berlin (Germany)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新藤 悦子 (Etsuko Shindo)
慶應義塾大学・看護学部・准教授
研究者番号：20310245

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

茶園 美香 (Mika Chaen)
慶應義塾大学・看護学部・准教授
研究者番号：10269516

小松 浩子 (Hiroko Komatsu)
慶應義塾大学・看護学部・教授
研究者番号：60158300

山岸 直子 (Naoko Yamagishi)
東京医科大学・看護学科・講師 (2011年のみ)
研究者番号：10320821